上田安三郎年譜

上田寿四郎

一　出自・修業時代（一八五五―一八七六）

○安政二年（一八五五）二月二十九日、長崎市浦五島町旧柳川屋敷で出生。池田源左衛門安道、同わか（門岡氏）の三男。三歳のとき長崎外浦町商上田栄助の養子となる。栄助は古賀家の出で後に上田姓を冒した。

・六七歳から太田寿吉・長川幹二等について読書を学び、八歳、広運館に通学し始め傍ら儒者呉来安に漢籍と書法を習った。

○明治二年（一八六九）十五歳

・養家の経済上、学業を廃し伝手を求めて当時長崎在留の米国人ロバート・ウオルカー・アルウインに雇われ、月三両を給される。アルウインはフイラデルフイア出身の実業家で慶応二年に来日し、井上馨や伊藤博文とも相識であった。長崎では亜米壱（アメイチ）と称せられたウオールシ・ホール商会に関係しそこで益田孝とも親交を結び、後に先収会社、続いて三井物産会社の顧問となる。

・安三郎はアルウインおよび夫人ゆき（江戸の商武智氏の女）の深い信頼をかち得て家族同然に遇され終生かわらなかった。

○明治三年（一八七〇）十六歳

・四月、アルウイン夫妻に伴われて長崎を去り初めて東上、以後横浜または東京に在住、明治十年まで生れ故郷には帰らない。

○明治六年（一八七三）十九歳

・五月、偶ま健康を害して浅草橋場にあるアルウイン別邸で静養中「頻リニ外国ニ往キテ修業ノ望ミヲ起ス、之ヲ亜氏（アルウイン）ニ謀リ、偶々亜氏ノ親友ロースロップ氏ノ帰国スルアリ、同行ヲ諾サレ爰ニ漸ク愁眉ヲ開ク」と上田自筆の略歴に記されている。

・九月、アルウインの助力で宿願がかなった安三郎は、同月八日「大平海飛脚船」チャイナ号で横浜を発し、二十一日間を費して三十日サンフランシスコ着、数日間滞在して十月八日出発、大陸横断鉄道（四年前開通）でニューヨークに至り、同月十五日に最

終目的地たるボストンに到着した。
・ボストンではロースロップ博士（同伴者の父）邸に一旦落ち着き、数日後同市フイリップ街の公立フイリップ・スクールに入学してそこで中高程度の課程を修めたが、明治八年（一八七五）六月同校を卒業すると、同年九月更にロックスベリー・ハイスクール（公立）に受験入学、同校で語学・修辞学・英文学を修める傍ら、ワシントン街にあるコーマース・コマーシャル・コレッジと称する私立の商業大学（おもに夜間）に通って商業学、経済学、簿記法を学んだ。
・その頃（一八七六年）安三郎はボストン市の郊外、ボストン・ハイランドにある下宿に移ってそこから通学していたが、この地は当時各藩から選抜されて渡米し、ハーバード大学やマサチユセツ工科大学に学び、帰朝後各界で名をなした多くの日本青年が屯ろしていた学生街があって、安三郎もそれらの青年たちと交わり、度々会合したり、同宿したこともあった。（在米時代、上島安三郎と称していた。）
・安三郎が親交を結んで、写真も交換したそれらの日本留学生中には、福岡藩出身でマサチュセツ工科大学に学ぶ團琢磨がいたが後に図らずも同じ三井で、両人とも理事に任ぜられていた明治三十一年五月二十一日の上田の日記には、
「團と自分主人トナリ、ハイランド会ノタメ花月楼ニ参ル、来会者
金子堅太郎、小村寿太郎、中山寛六郎、
平岡熙、三岡丈夫、伊沢修二、森明善、
菊地武夫、吉川重吉、斎藤修一郎（欠席）」
と記され、みな往年のボストン留学生である。
・渡米後すでに二年余を過ごした安三郎は、某日東京の庇護者アルウインに書を寄せて、自分はすでに英語一般に十分習熟して第一願望を達し、高校にも進学して成績は悪くないが、一部の学課の進行の遅々たるにあきたらず、貴重な時間を不急不要の学問に徒費するに忍びないので高校を退学し、私立大学で簿記法等を専攻する傍ら適当な商社に出入して商業の実習をする決心であることを告げた。それに付てはロースロップの賛成も得て、言葉通り実行したが、クリスマスなどには、フイラデルフイアに住むアルウインの生家にその母堂や令妹を訪れて休日を楽しんだ。
○明治九年（一八七六）二十二歳
・ロバート・アルウインはその頃、ヨーロッパ旅行に故郷の母や妹を同伴するため日本を発して一旦帰米し、二月中旬ニューヨークに着くことになったが、この事をロースロップから知らされた安三郎は、彼と共にニューヨークまで出迎え、同月十八日三年ぶりでアルウインに再会した。そしてその夜は三人で食事を共にしたり観劇したりした。
・アルウインはフイラデルフイアに帰省し、母妹を連れて三月中に欧州向けに出発するのであるが、安三郎は英国まで同行することになった。この事はすでに前から予定されていたらしく、二月半までにコーマース校の退学手続も了し、ボストンでの内外の友

人達にも告別した。しかし安三郎の英国行きは、更に彼地にある期間留学のためか、または日本への帰国の途上の見学に過ぎないのか今でも判明しない。二月末日ボストンを去り、ワシントンにも寄ってニューヨークに至り、三月十一日出帆アルウイン一家と共に英国に向かった。大西洋上十日間の航海で二十一日リバプールに着き、翌日夕ロンドン入りをしてピカデリー街のホテルに投じた。

その後アルウイン親子は大陸に渡り、パリやイタリア見物に出かけたが、安三郎はロンドンで下宿に移り六月まで滞在したが、その間、四月末から五月半ばまでパリにも滞在した。パリではフランス語のレッスンをとりはじめた程だから、長く滞在するつもりだったかも知れないが、その時イタリアから戻ったアルウイン一家に合流して急ぎロンドンに帰来した。そして六月五日ロンドンを去り（たぶんアルウインも共に）、ベンガル号に乗じてジブラルタルから地中海に入り、ポートセイド、スエズ運河（七年前開通）を経て紅海、ベンガル湾、ペナン、シンガポール、香港等各地に寄り、二ヵ月目に漸く故国の領海に入り、八月五日横浜港に帰り着いた。（急遽帰日に踏みきったのは東京での就職が決定したためかも知れない。）

二　三井物産上海支店時代（一八七六―一八九二）

○明治九年（一八七六）二十二歳（承前）

・九月五日、アルウインの推薦で三井物産会社に入社し、会計方見習として東京の本店に勤務しはじめた。三井物産は同年七月二十九日の創業早々で、社長は益田孝、副社長に木村正幹、社員は馬越恭平以下数名に過ぎず、本店は日本橋兜町にある貧弱きわまる建物であった。（馬越恭平伝）

○明治十年（一八七七）二十三歳

・一月二十六日付で本採用となり、月給八円を給される。

・六月、清国上海へ出張を命ぜられた。三井物産上海支店開設のためである。当時の上田の日記に、

「一体上海（三井物産）出張店ハ長崎支店ヨリ設クルモノトスル故ニ一旦長崎支店詰ヲ命セラレ同地ニ向カッテ出張ス」と記され、すなわち六月八日東京本店発、横浜支店で寒天見本並びにプライスリストなどを受取り、その午后名古屋丸で長崎へ向かった。翌日神戸で上陸、当時西南役で警戒厳重な中を鉄道で大阪に至り、高麗橋にある支店（出張所か）で支配人拝司永造と用談し、再び神戸から船で馬関を経て十二日夜長崎に着いた。深夜だったが長崎支店に俥を飛ばして着任を報じた。

・長崎支店では支配人羽太克紀とともに上海支店開業について相談したり、石炭方の風帆船積渡し実況を見学したり、専ら上海開店の準備のため一ヵ月余を費したが、その間数日の休暇を乞うて筑後柳川へ実父母を帰省した。長崎には当時、養父の栄助も健在で五島町旧筑前公（黒田藩）屋敷内に偶居していた。安三郎は薄給を割いて養父への仕送りを絶やさなかったが、養父は安三郎の

海外からの帰朝後も一度上京して会っていたらしい。しかし柳川に隠栖する実父母とは明治三年出郷以来はじめての対面で、しばらくは言も無く涙にくれていた。安三郎はその時のことを述懐して、

「国ヲ辞シテ十年漸ク帰郷シテ養父並ビニ実父母ノ壮健ナル体ヲ見、喜ビ亦何事カ之ニ如ン旅中只思ヒ案スル事ハ生国、其生国ヲ思フハ只父母ノ在スカ故ナリ」と書きのこしている。なお、実兄実姉妹もまだ健在で、その他長崎には親類縁者が多かった。

・七月十七日、「午十二時東京丸ニ乗ジ長崎ヲ出航シ上海ヱ向テ発ス、十九日晴午前第十時清国呉淞ニ着シ此処ニテ汐充分ナラズ、第五時半頃ヨリ再ビ上海ニ向テ発ス、上海港着（七月十九日）午後第七時田代屋（注、日本人旅宿）ヱ上陸ス（上海行旅中日記）」

・七月二十日、「第十時ブリネヲ問テ益田羽太ヨリノ両書ヲ届ク、ブリネハ先ヅ悦喜ノ体ニテ出張セシ義ヲ賀ス」。ブリネは広東路に店を構えたスイス人の貿易商で、曾て横浜の亜米壱すなわちウオールシ・ホール時代に同僚だつた益田孝が、明治九年上海に渡航した際に「その店の一部分を借り物産会社から人を出して石炭を売らせやうと云う考を持っていたので、ブリネに会ってその話をすると早速快諾してくれた（自叙益田孝翁伝）」のが、今日上田の着任ではじめて実現したのであった。

同日、日本領事館で総領事品川忠道にも面会した。「品川領事吾ガ出張ヲ賀シ、後ニ当地滞在日本商人ノ景況ヲ説キ、会社（三井）ヨリ出張スル上ハ相成ル可キ丈ケ商品本邦ヨリ輸出ヲ盛大ニシテ諸商估ノ先導タランコトニ注意スベキ旨意見懇切ニセラレタリ。（上海行旅中日記）」品川領事は伊藤博文（工部卿）の命により予て現地の市場調査を続け、そのために三池石炭の各種見本百斤ずつが、明治九年から同領事宛に送られていて、それが上海送炭の始めとされている。

もちろん三井物産上海支店の取扱品目は三池石炭ばかりではなく、入船毎に送られてくる米・茶・海産物その他のサンプルと共に上田の現地活動は始まり、一方ブリネ等の紹介で匯豊銀行（香港上海銀行）、輪船招商局（招商局）その他の有力な外商や清商にも関係をつけるようになった。

・十一月八日付で、三井物産上海支店詰を正式に申付けられ、月給二十五円、賄料十円を給されることになった。

○明治十一年（一八七八）二十四歳

・三月、社命によって上海から天津に出張し「北清貿易に関する各般の調査を遂げ、其結果同年五月一日を以て仏船ボルマリー号に麦を塔載して長崎を発し、天津に向かはしめしが、当時に於ける貿易の如何に困難なりしかは如何に巨額の貨物にても之を量るに秤器を以てするにあらざれば清国人の承服せざる一事にても知るべし。其後同氏（上田）等の手に於てわざわざポンド衡器を上海より取寄せ一々衡量の比較を示して僅かに清人の同意を得たる由（中外商業新報明治三十四年七月十三日付所載故上田安三郎氏の略歴）」。麦に引つづき石炭・白米各一艘を天津に向けて輸出し

たが、これが北清向け貿易（三井物産の）の嚆矢といわれる。

○明治十三年（一八八〇）二十六歳

・三月二十日付、番頭二等に昇進、上海支店預り支配人を申付けられた。三井物産の初代上海支店長である。月給は二十五円だが、十月から毎月手当洋銀三十ドル、交際費二十ドルを給されることとなる。当時の支店員は、八巻道成、福原栄太郎、副島義太郎、長谷部信義等であり、後者二名は先収会社の旧社員で、はじめは長崎またはロノ津詰であった。

・三池石炭の本格的な輸出は、明治十一年ロノ津から風帆船千早丸（六〇〇トン）で上海へ積出されたのに始まるとされているが、翌十二年に秀吉丸（七〇〇トン）、十三年に頼朝丸（一二〇〇トン）が三井に入手され、三池炭販売はようやく軌道に乗ってきた。しかし当初、「販路開拓には上田氏始め実に苦心したもので（中略）店員は印度巡査の履くやうな靴を穿ち、支店長始め自ら歩き回って商売をし、利益も極く少く半期に四五千円位であった」と、頼朝丸の石炭の上乗りで早くから上海支店に出入りした山本条太郎は、後年今昔談で語っている。

・九月二十二日上海発、上京の途につく。長崎、大阪両支店に立寄った後、三十日に入京、直ちに本社に出頭。益田社長は不在で木村副社長に事務報告し、また即日、第一国立銀行に至り佐々木勇之助に面会、コレスポンデンス約定改正の件を述べた。総裁の渋沢栄一は退出後だったので深川の私邸にまでおしかけて行って面会し、上海の成行現状等を上申した。国立銀行は明治十年以来、日本銀貨の上海・香港地方流通のため、荷為替業務の代理店を上海三井物産に委托していたが、その頃約定改正の議が起こって来たので、東京でその草案を起草することが、今度の上田の上京の目的の一つでもあり、その主旨は「損益ヲ折半シテ可成得意先ノ弁（便）利ト信用トヲ謀ルコト（上京日記）」でもあった。在京中はアルウイン邸（芝栄町）に逗留し十月十三日に離京して上海に帰任した。

○明治十四年（一八八一）二十七歳

・九月、山田寿子と結婚した。馬越恭平の媒酌で、東京橋場のアルウイン別邸で挙式、益田孝、益田克徳、富永冬樹、ロバート・アルウイン各夫妻および木村正幹が同席した。寿子は故山田直の次女で、益田克徳夫人の実妹である。元治元年（一八六四）神田で生まれ、久松学校を出た。また横浜でヘボン博士夫妻の学校に通った。

・新夫婦は九月末大阪に立寄って長崎へ帰省した。故郷では既に亡き（明治十一年没）養父の展墓をし実家池田両親および兄姉妹に新妻をひきあわせ、上野彦馬（写真の始祖）で撮影もし、十月初旬まで長崎に滞在した。

・その前、上田は同年八月上旬に上海を発し長崎を経て三池に至り、鉱山局（分局）長小林秀知に会い、大浦・七浦等の坑内を視察した後上京、結婚前後の在京中も会社主脳部との接触はもとより、井上・伊藤両参議や渋沢栄一とも会見して上海あるいは三池の事情を上申するなど、公務で殆ど寧日がなかった。そして帰途

も三池に立寄り、漸やく十月六日に夫婦揃って上海に着いた。上海支店員はそれまで、妻帯者は古参の長谷部信義だけであった。長谷部夫婦は社宅でも同居し、常に上田夫婦の側近にあって、公私両面で長く上田およびその家族のために尽した。

○明治十五年（一八八二）二十八歳

・八月二日上海発、長崎・大阪を経て十日入京、二十三日まで滞在中、東京風帆船会社株主総会（八月十五日）に出席、同日の日記に「東京風帆船会社ヲ共同運輸会社エ合併ノ議論種々アリ終ニ合併スルニ決ス」とある。離京前に益田社長と、新造船、頼朝丸秀吉丸入費、上海支店人事等の諸案件および会社全体にわたる今後の方針等に付いて熟議をこらした。同月三十一日上海に帰着、留守中の支配人代理は八巻道成が勤めていた。なお十一月十六日長男信一が誕生した。

・十二月七日朝上海出帆、英郵便船ブレンデシ号で、単身香港へ向かう。香港市場開拓第一歩である。

・十二月十日早朝香港着、ホテルが満員のため広業商会（注、当時香港では唯一の邦人商社か）社宅に宿泊し、翌日から、太古洋行、義利洋行、招商局等、上海からの紹介状を持参して歴訪し三池石炭約定取付けに奔走した。後に代理店を引受ける太古（バタフイールド・アンド・スワイア商会）には、再三足を運び支配人マキントシと直談したが、なかなか難航した。

「マキントシ氏ハ売却エゼント引受ケタキ望ミアルヲ以テ話混同シ談整ハズ遂ニ三ケ月ノ猶予致シ本社ト篤ト打合セノ上ニテ取極メ申ス事トス、但シ暫時右三ケ月間千五百トンノ粉炭ヲ洋四弗七十五仙替約定シ外ニ若干送リ荷スルコトニ約定致ス」と日記にある。三池炭香港向け輸出量（ロノ津積）はこの年（一八八二）に俄然一万五千トン以上にのぼり、以後上昇し続けた（別表参照）。なお益田社長はその頃、人に向かって「之までは一ケ年三十万トン（三池採炭量）を滞りなく販売していたが、香港は更に一ケ年三十万トンの市場で、（供給量さえあれば）香港市場も取ってしまう」（自叙益田孝翁伝）と豪語していた。

・十二月十九日まで香港滞在中、広東（広州）に行き、市中およびいわゆる画舫の夜景も見物した。また香港では九竜島もはじめて見物した。香港は往年英国よりの帰途に寄港した曾遊の地でもある。同日デゼムナ号に乗じ、十二月二十三日上海に帰任した。

○明治十七年（一八八四）三十歳

・十二月、一等番頭に昇進し、「当会社創立ヨリ従事シ明治十年ヨリ該地（清国上海）支店開設以来之ヲ担当シ石炭販売拡張ノ功少ナカラザルニ付特別賞与金六百円」を支給された。

・この年九月に実父池田安道（七十歳）が長崎で病死した。安三郎は妻と共に上海から駈けつけて、臨終をみとり、皓台寺に葬送した。（実母は前年に死亡していた。）十月中長崎に滞在後、十一月上旬に上京、会社幹部および松方大蔵卿その他高官と面談、十二月一日上海へ帰任した。

○明治十八年（一八八五年）三十一歳

・五月、香港へ出張、副島儀太郎が随行した。同月十一日先ず

「太古洋行ニ至リマキントシニ面談、来十九年一月ヨリ我社ニテ自身ニ開店スルノ意ヲ述ベ（日記）」、従って前年から結んでいた代理店契約解除の相談を進める。一方、怡和洋行（ジヤーデイン・マセソン）、旗昌洋行（ラッセル）、天祥洋行（ドドウエル）等の外商との新約定取付けにも成功し、もちろん日本領事館（町田領事）や取引銀行の香上銀行（支配人ジャクソン）その他をも訪問して支店開業の地固めをした。

・五月十九日、更に南清各地開拓のため、香港からチイエン号に乗じて出発、二十日先ず汕頭に着、同地の太古支店、ブラドレー商会、シャール商会等を歴訪して、石炭・小麦等の商談を進め、翌二十一日には厦門に上陸し、ラッセル、ブラウン、ボイド等の各社を訪問、その主脳部の多くとは上海または香港での旧知であった。

・厦門で乗船を替え更に福州に向かった。その外輪船の船室は満員で「船客ハ何レモ福州茶ノ開市ニ赴ク人ナリ、支那人ノ客モマタ夥シ」くその夜は甲板上で「清客等ノ傍ラ、トロンク数個ヲ並ベテ寝台トシテ打臥ス、副島ハ終夜臥セズ、翌朝洗面器トテモ無ク僅カニ粗末ナルチンバケット（錫バケツ）ニ水ヲ得テ手水済マセタリ」という有様であった。

・二十三日夕福州着、福州ホテルに投宿したが粗末なホテルで同室客が数名あり、ソファ上で不眠の夜を明かした。暑気は日中華氏九十五度。福州市街は「ワガ大阪ニ比シテ可ナリ」の繁華ぶりであった。

・福州でも怡和・太古等の出先を訪問、またトクマコフ・モロトコフ商会（ロシア系か）で支配人に面会、石炭注文の礼を述べ併せて石炭運賃の件などを談合した。蓋し同地にはすでにロノ津から秀吉丸や熊阪丸が通航していた。同社経営の製茶工場を見学したが、この時三池粉炭は「用ユ可カラザルヲ知」った。二十七日まで同地に滞在した後、上海に去ったが、当時福州在留邦人は軍人を含め数名で、商社は岸田吟香の上海楽善堂の分店があった。福州は清商の団結が甚だ強く、木綿類などにしても大部分清商の手であきなわれ、その僅少部分のおこぼれが外商の手にあることも知られた。

・香港その他の地で粉炭の欠点特に貯蔵庫内での発火が問題にされていたが、三池石炭にはその心配がないことを、東京工部大学教授のダイバルスおよび怡和その他大手ユーザース側の証明書を持ちまわっていた。更にこの年十月に三池に出張した上田は、小林鉱山局（分局）長と直談、いわゆる粉炭を更に篩分けして塊炭を取出そうとする「再撰篩漉」制度をあらためさした。

・六月某日、益田社長が三池の小林鉱山局長に随行して、支店開業以来はじめて上海へ渡来し、支店内外の営業振りをつぶさに査閲した結果、全体に外国商社のシステムを採り入れて周到な管理が行われ、よく統率されており、対外的にも好評を博しているのを見て大満足し、小林局長も大いに賞讃した。「是レ他ナラズ幸ニ主任者其人ヲ得タリトイフベキナリ」と、その年度の社長名の事業報告中にうたっている。

・十二月二十八日付で、元締役心得を申し付けられ、また上海支

店支配人兼香港支店支配人を命ぜられた。その頃はすでに再び香港に在って、支店開業の準備に忙殺され、同地で越年した。

○明治十九年（一八八六）三十三歳

・一月一日、三井物産香港支店開業。上田支配人の下に福原栄太郎が副支配人、小室三吉がその次席に控えたほか、東京商業出身の高柳豊三郎が店限としてやとわれていた。当時香港・上海両支店を併せて社員は約十名であり、それらは都合で何時でも交代できる体勢にしておけば、自分が頭に立って両者を緊密な関係で運営できるというのが上田支配人の方針で、益田社長もそれに納得していた。

・一月五日、新支店開業早々の香港をあとにして、上田は単身シンガポールへ向かった。

・十日（日曜）現地着、ホテル・ユーロプに投宿して翌日から、ダブルユー・マンスフィールド、ギルフィラン・ウード、パターソン・シモンズ、ボウステッド、其他の商社を精力的に歴訪した。それらはすべて英国系の石炭商、汽船会社代理店、ドック（埠頭業務）会社、倉庫会社等で、上田は香港で入手した太古洋行、旗昌洋行、その他の紹介状をもって各社の主脳部と直談し、現地の石炭事情をくわしく聴取しながら、同時に三池炭のＰＲに努力した。

・当時シンガポール市場は英国産石炭が大宗で、他に濠州炭またはボルネオ炭も出回っていた。益田社長ははじめ、日本石炭が彼地の市場をどの程度席巻できるかと危うんでいたらしいが（内状〔16〕参照）、その解答は同年以降の同地向け輸出統計数字（本稿附表参照）に自ら現われている。（なお当時の上田日記は英文で各外商との折衝を詳細に記録している。）

・一月十四日、シンガポールを去り、オーシャン汽船のオレステス号で二十二日香港へ帰還した。この船中でも機関長と三池炭のメリットなどについて意見をかわした。

・同年六七月の交一時帰朝したが、八月末には上海から天津へ出発した。

・「此天津行ハ開平鉄路公司ト敷木約定ノ事アルヲ以テ思ヒ立チ」、八月三十一日上海出帆、九月二日に芝罘（領事松延弦）に寄り、三日太沽着、天津に入った。天津には上海支店から佐々木裕司が派遣されて駐在していた。

・九月四日「午後佐々木同道、伍廷芳（開平鉄路公司総弁）ヲ訪フ、檜及び樺ノ見本ヲ呈シ約定ノ事ヲ談ズ、薩摩焼花瓶一対ヲ土産トシテ贈ル。（上田日記）」

・同月十三日「伍廷芳午前十時半来訪（上田の宿舎アストルハウスに）敷木一条相談相決シ、共ニ領事館ニ到リ約定書ニ記名シテ波多野（承五郎）領事ノ公証ヲ受ケ各一通宛ヲ納ム。（上田日記）」なお銅・活字・米などの商談で同地の機器局、時報館等に出入し当路の清朝役人と折衝した後、九月下旬上海に帰任した。その夏は益田社長も馬越恭平を同伴し、山県・井上両大臣に随行して北海道産業視察に出かけ、帰路東北地方にも回って北清向け輸出材の調査をした。

・十二月三十一日付で上田は元締役に任命され、同時に特別賞与七百円を受けた。

○明治二十年（一八八七）三十三歳

・三月初旬、益田社長夫妻が三井高保・関直彦その他と共に渡欧するのを、上田は長崎まで出かけて一行を迎え、香港まで同行した。香港では益田を案内して太古・怡和・旗昌および香上銀行等の関係筋を訪い主脳部に挨拶してまわった。また旗昌（ラッセル）支配下の製縄工場やガラス工場、怡和（ジャーデイン・マセソン）経営の精糖工場、九竜倉庫埠頭会社を視察した。香港ホテルにも行き帳場・酒場・球戯場・食堂から便所に至るまでくわしく見学した。蓋し「東京ニテ一大旅館設立ノ事アルヲ以テ参考ノ端トス（上田日記）」るためであった。（注、同年六月東京有楽町に東京ホテルが開業された。）社長一行は同月十五日香港を離れ、次の寄港地シンガポールへ向かい、上田は二十一日まで残って上海へ帰った。

・香港滞在中、漁業用縄具、砂糖などの内地売捌きの話も進め、また九竜倉庫会社の株式入手にも成功した。なお上田はこの旅中に益田社長と水入らずで、会社の現在並びに将来の方針其他について、屢々熟議する機会にも恵まれた。

・三月二十四日に上海帰任した上田は一ヵ月後の四月二十九日に再び香港経由シンガポールへ向けて旅立った。今回は小林秀知局長を始め三池鉱山局の役人に当時の長崎支店支配人金子弥一ほか一行八名の多勢で、帰路にはまた汕頭・厦門・福州を巡り六月初旬上海に帰った長旅であった。

・五月三日、香港着五日まで滞在、十日にシンガポールに上陸した。香港でもシンガポールでも倉庫会社や埠頭会社に一行を案内して三池炭を始め各地石炭の貯蔵状態をつぶさに検分させた。三池炭は各地ともかなり売られていたが、やはり日本炭は発火の恐れを嫌われ、シンガポールでは「三池ナド其事ナキニ安心セシモ粉分多クシテ積ミ立テノ（容）積多分ヲ要スルヲ以テ日本産ニ限リ屋根ナキ地面ニ積ミ置ケリ遺憾ト云フベシ」と上田は記している。同地タンジョン・ペカル・ワーフ埠頭会社の倉庫は、常時十二万トンの貯炭があり、英国炭を主として濠州炭、ボルネオ炭もあるが日本炭は主としてローカル航路の焚料に使われ、三池炭は常時五千乃至七千トンの需要があった。

・一行は一旦香港まで戻り、五月二十五日に同地発、汕頭・厦門に寄って三十日福州に入った。行く先々で石炭事情を調べ、福州では役人達が城内見物に出ている間、上田は金子と共に昨年来旧知の露系三商社と商談した。上海に帰着したのは六月一日であった。

・六月二十一日には、またまた上海を離れて、今度は北清に旅立った。二十四日芝罘着、松延領事と共に道台盛宣懐を訪い、銅売込みの商談を進めた後、二十八日に天津に入り、昨年に続き敷木約定のため伍廷芳総弁と会談、七月六日三万本の約定成立、あと口三万本も十三日に約定を了した。十七日に北京に入り銅ならびに紙の商談に奔走して二十一日まで滞在し、紫禁城も見物して二

十三日天津に戻る。

・六月二十六日には天津を発し直隷省開平炭坑行。老河を溯り、開平炭の積出港である閻荘まで舟行、ここから単線鉄道で二時間、炭礦に達する。四日間礦務局長唐景星の接待を受けて炭坑内外の設備を審さに見学して三十一日に天津に戻り、八月初め上海へ帰った。

・十月には帰京し十二月まで滞在、この間に欧州旅行を了えて帰朝した益田社長に逐一出張報告を述べた後、妻子と共に箱根や熱海や湘南に遊んで、歳末にようやく上海に落ちついた。上海支店（社宅）では、毎年クリスマスや新年宴会が催され、福引や清国人の曲芸などで社員たちをたのしませた。

○明治二十一年（一八八八）三十四歳

・二月初旬から香港支店に長期在勤していたが、その頃内地では三池炭礦払下げの帰趨が予断を許さず、遠隔の地でこれを窺っている上田の焦慮は大きかった。しかし是が非でも三池を手中に収めねば止まぬ決意の益田はそれらの対策に、小林秀知も加えて熟議するため上田を東京に招致した。その在京中四月某日三池払下げ規則が正式に公告された。

・五月中旬上海へ帰任し間もなく再び香港へ出向したが、六月頃同地でかなり重く胸部を病んで病床に倒れた。間もなく回復して上海へ戻ったが、これが宿痾となって終生癒えなかった。（自分はあまり長生きしないと上田は常に妻に洩らしていた。）

・八月十八日、三池炭礦ついに三井に落札の報を得て上海・香港両支店は喜びに湧いた。支配人の満足はもちろんであった。しかし三池が、法外な大金を投じて完全に三井の手に帰した以上、今後その経営管理の責任は大であるとなし、会社の業務方法も大改革を要するという意見で益田と上田は全く一致していた。（内状〔75〕）

・上田は差当り払下げ後の三池炭輸送船腹問題、山元堀置き残炭の処分、小林旧局長其他の処遇、有能な鉱山技術者の招聘などに付てそれぞれ献策を抱えながら、益田社長からの強い出京要請にもかかわらず、ますます重要性を帯びて来つつあった出先支店長の席を一日も空けられなく、そのまま年内には両者会見の機が見つからなかった。

○明治二十二年（一八八九）三十五歳

・一月、三池炭礦社が設立されて官営三池炭礦の事業一切を三井（組）が引継いだ。上田は三月初旬上海を発し、長崎で東京からの益田社長並びに三井家同族の代表者と合流して三池に至り、三池や大牟田の商工関係者と三井側との顔つなぎの会合や招宴に加わった。

・一方上海では、かねて内地の紡績ブームに合せて計画が進められてきた綿繰り工場（コットンジン）の会社棉花公司が、年初から黄浦江岸浦東に発足した。小室三吉は後年これを回顧して

「上田君は疾くも支那綿に着眼して実綿を繰る会社を起し（中略）二十五台の綿繰り機械（注、プラット・ブラザース社製）を英国から輸入して一会社（株式）を設け、それには支那人（清国官辺）

の故障を遠慮して英・仏・独・米等の外国人を重役に加え共同の事業としながらも主として日本人の事業として日本人を使って経営した（中外商業新報大正七年七月）」と語っており、株式募集には上海だけで二十六名の応募者があり、面目を施したと上田は益田に報じた。

・「上海における日本人の地位が極めて低く、外国人から何時も馬鹿にされていたのを、日本人侮るべからずと彼等に自覚せしめたのは上田さん（上海支店長）のアメリカ式社交法が因をなし（中略）何しろ一人の外国人も使っておらぬ三井支店が外国人間に敢然と日本人の気を吐いた」と福井菊三郎も語っている。山本条太郎の伝記中にも、上田支店長が西洋人や中国人の間に非常な信用を博したことを特記している。

・山本の伝記ではまた上田が、部下社員に外国流の商法や商業道徳について厳しく教え込んだのみならず、日常の礼儀作法や身だしなみまでやかましく注意し、週一回社員と食卓を共にしてテーブルマナーを習わせたと伝えている。学校出の新入社員の多くは先ず上海支店に送られたが、中には角帯姿で現われ、カーペットの上に直かに坐って、支店長の足許でペコペコお辞義する者もあった。またナイフに肉をのせ、そのまま口に運ぶ者もあって、上田はそれを「水夫の食べ方です」とたしなめた。

・この頃までに最古参の福原栄太郎（明治十二年上海着任）をはじめ、後に上海・香港・新嘉坡のそれぞれ支店長を勤めた小室三吉（十六年着任）、福井菊三郎（十六年着任）、藤瀬政二郎（十八年着任）、山本条太郎（二十一年着任但十五年入社）が次々に上田の配下に入って来ていた。

・しかし当時支店員の給与は一般に極めて薄く、山本も述べている如く「十七八円位（手代級の平均）でみな貧乏をしており」、従って会社からの借入金（又は立替金）もさかんであった。支配人自身もご多分にもれず、明治十年上海着任以来二十四年までの上海支店における会社立替金の総額は一万九百九十一円七十三銭にのぼった。ただしこの全額は実は上田一個人のみの用ではなく、社員の借入金が含まれており、つまり部下社員のいわゆるIOUはすべて上田個人の名義で貸与され、そのために社員別の詳細な仕訳帳が作られていた。

・明治二十五年の年末、上田がすでに帰朝して重役に就任していた当時、本社から特別な沙汰があって、この貸金全額の三分の二が免除になった。上田は直ちに上海支店勘定方に宛て、「此度小生ヨリ会社ニ対スル借用金ニ付其金高ヲ減少ノ恩命相蒙リ候間小生ヨリ他社員ヱ貸金ノ義モ同様減額取計申度心得ニテ目下取調中ニ有之候（後略）」と書き送った。

○明治二十四年（一八九一）三十七歳

・六月六日、新嘉坡出張店支配人兼務を申付けられた。

・三池払下げ後、三池炭の需要はとみに増加し、特にシンガポール向けは、倫敦支店（支配人渡辺専次郎）とも緊密な連絡をとって、盛大に売り出した。その結果は益田が自負した通り、「香港市場を取り更にシンガポールにも支店を出さなければならなくな

った」。そしてまた、バタビア（ジャワ）、ラングン（ビルマ）向け約定（ロノ津積）まで続々成立していた。

・八月、この年も上田は上海を離れ、十月末まで長期にわたって上京した。その間益田と常に行動を共にし、井上馨とも長時間要談した。また團琢磨とも度々接触した。團とは前年七月、上田が上海から長崎・三角などへ出張したとき熊本で会見し終日懇談した。團は三池炭礦社設立とともに三井入りしていたが、技術家を首脳者（三池炭礦の）にすべきものという益田および上田の一致した意見が具体化して、後に事務長になった。その年（二十三年）の九州地震で三池勝立坑がほとんど廃坑化し、その救済で團に負うところは大であった。

○明治二十五年（一八九二）三十八歳

・四月二十五日付で帰朝を命じられた。足かけ十六年在勤した上海の地を去る年である。

・それに先立って二月九日、先ず香港をおとずれ、太古・怡和・PO汽船および香上銀行等関係筋を訪問し、告別したり後任者の紹介をしたりしてまわった。香港支店には福原副支配人のほか大野、松岡、遠藤が在勤していた。

・二月二十三日にはシンガポールに着いた。新嘉坡出張所はバタリー・ロード八番にあり、当時福井をはじめ副島、林、犬塚が駐在していた。上田はこの地でも、マンスフィルド、ボウステッド、香上銀行、PO汽船その他驚くべき多数の外商・華商を訪問した後、再び香港に寄り上海へ帰還したのは三月四日であった。

・強行軍の旅の疲労で三月中病褥についたが帰日が迫っているので寝てもいられず、医師の手当を受けながら、連日関係筋や内外の知友との会合に追われるようであった。四月七日には残留社員一同を招いて惜別した。明治十年ブリネ商会の一隅で単身開業した上海支店も、今は四川路の独立店舗に三十七名の社員を擁していた。それらの残留社員一同から金盃一個が上田支配人に餞けられた。その連名を特にここに録しておきたい。（香港・新嘉坡および北清駐在員をも含む）

福原栄太郎、小室三吉、福井菊三郎、間島与喜、副島儀太郎、山本条太郎、松岡錐蔵、石田清直、長谷部信義、高木鉄太郎、岡田玄良、林昌雄、遠藤藤次郎、呉永寿、深堀駒太郎、青木道孝、辻子卯三郎、拝司文之助、池田広次、幡生弾次郎、犬塚信太郎、藤本悦次郎、田沼義三郎、島田粂太郎、原誠、松永多吉、服部弘毅、壇勝三郎、井上泰三、富安季吉、中山寿郎、伊勢堅八郎、藤本利吉、内田精、小柳七四郎、西川安太郎、石岡銈彦

・四月八日午前八時半、西京丸で、家族同伴上海を去った。（上海在留中、妻寿子との間に二男子三女子を挙げていた。年長の三人は当時長崎の実家池田家に預けて、学校教育を受けていた。）十日長崎着、馬関・神戸を経て同月十五日に東京に帰り着いた。東京における住居は、帰朝後間もなく芝区三田一丁目（現在港区三田二丁目）に定めた。その隣地にアルウイン邸（現在綱町三井倶楽部の所在地）があった。

・四月二十六日、三井物産会社委員（後の理事）に任ぜられ、外国部担当専務を申付けられた。月給は六月から百八十円になった。
・七月七日付で外国課（部）長を命ぜられた。外国部は日本橋北島町にあった。なお六月に益田孝は社長を退き、専ら三井鉱山会社を担当し、物産社長には三井養之助が就任した。

三　三井物産合名理事時代（一八九三―一九〇一）

○明治二十六年（一八九三）三十九歳
・七月一日三井物産会社は、鉱山・銀行・呉服店等他の部門と共に、合名会社に改組された。
・八月一日付で上田は専務理事、外国課長に任ぜられた。当日の日記に、
「委員ノ名称廃止ニ付、改メテ当社ヨリ専務理事ノ名称ニテ辞令書ヲ受ク、外国課長辞令同断、当八月ヨリ月俸二百二十円ノ辞令ヲ受ク」とある。
・十一月初旬三井武之助（物産理事）と同道し、三池・筑豊地方を視察し、更に上海、香港まで出張し年内に帰京した。
○明治二十七年（一八九四）四十歳
・三月四日、三池炭礦勝立坑着炭の報を得て大いに喜ぶ。蓋し明治二十五年七月デビーポンプ到着以来、團琢磨（三池事務長）の努力で勝立竪坑の排水に完全に成功した結果が現われたのであった。上田日記には「勝立着炭セリト益田ヨリ承リシニ付三池ニ祝詞申送又海外ヘ電報ス」とある。團はこの年の十月に三井鉱山合名会社の専務理事になった。
・上田は三月某日付、三井三池炭礦主総代三井三郎助の名で「多年三井物産会社上海支店ニ在テ三池石炭販売拡張ニ尽力シ功労勲ナカラズ依テ特ニ金三千円ヲ賞与」として給され、また十二月には三井鉱山合名社長の名で壱等賞票（金メダル）を贈られた。
・十月九日付で月俸が二百五十円になった。
○明治二十八年（一八九五）四十一歳
・五月、九州・関西出張。船舶関係の用務で長崎に滞在後、三池にも出張、勝立・宮ノ原・七浦等各坑を検分し、三池紡績会社にも寄り取締役野田卯太郎、永江純一と用談。帰路兵庫・大阪支店にも寄り、六月某日京都で三井一族、中井三平等とともに三井家廟所（真如堂）に参詣し、また南禅寺・大徳寺等の名刹、名園をたずね、そこで寺宝や古美術品の多くを観賞する機会にも恵まれた。六月十八日帰京した。
・八月十五日、三池石炭用外国文電信隠語（暗号）編纂委員長を命ぜられる。
・九月、上海紡績会社設立が決定し、発起人として奔走、取締役となる。
・十二月二十六日、月俸三百五十円となる。
○明治二十九年（一八九六）四十二歳

・七月二日、「三井物産設立以来満二十年相当故ニ益田氏ヨリ招キニテ五等手代以上品川（注、御殿山益田邸）ニ参ル」。当時馬越恭平が退任し益田孝が専務理事になっていた。
・八月、北海道出張。十二日函館看、十六日まで滞在して物産支店を中心に多数の人と面会、十七日夕張炭山を視察後、札幌を経て小樽へ。十九日小樽から航路で増毛・留萌・仁木・余市等の三井漁業部基地を巡察し関係者と会談して魚油・魚網などの商況を精査した。
・〔択捉行〕九月に入って六日函館出帆、二百十日前後の時化中を択捉島に向い、釧路を経て八日厚岸湾に至り、風雨中四五日間を船中にとじこめられ十四日漸く厚岸港上陸、関係者から漁情を聞く。十七日函館へ帰着して本社宛に「エトロフ、マス漁模様イヨイヨ宜シク本年二万石大丈夫確カナル見込、大漁ニテモ安値ナシ、六五〇円以上見当」と打電した。帰路は船で新潟へ寄り地元の業者と会見し帰京した。
・九月二十三日、三井商店理事会会員を命ぜられた。

○明治三十年（一八九七）四十三歳
・二月十九日、東京商業会議所議員当選。
・八九月にかけて九州地方へ出張。筑豊炭田の田川・豊国・金田・赤池各炭坑並び山野坑区等を巡察後、三池に向い、八月末日大牟田に着し、勝立坑の新発見炭層を検分（注、同年七月三日の日記に「團理事来社三池勝立ニテ上層八尺炭ヲ見出セシ云々」とある）、九月に入って熊本、三角、ロノ津へも行き一旦大牟田に戻って三池を去り、帰途は博多に寄り、地元の実業家および商業会議所の代表者の前で講演した。馬関では貝島太助と会談し、阪神各地支店をまわって帰京した。
・九月商況社が合資会社となるに付、出資者（一一名）の一人となる。出資金六、二〇〇円。（日本経済新聞八十年史）
・この年十二月二十四日の日記に「会社当半季純益金六十二万円」とある。なお上田の二十九年上半季賞与は四千五百円であった。

○明治三十一年（一八九八）四十四歳
・三月、日本煉瓦会社監査役を兼務する。
・東京に定住して数年来、今までの長い海外勤務の反動からか純日本風の生活様式を愛した。殊に茶の湯は、三井家および重役仲間のつきあいで自然深入りし、益田克徳や柏木貨一郎の指図で、三田の自邸内を造庭し茶室（木村清兵衛作）も建てた。新席開きには益田三兄弟、朝吹英二、馬越恭平を招いて、始めて自らの点前を披露した。それら三井家の人々の外、瓜生震、浅田正文、近藤廉平、加藤正義、福地源一郎などとも屢々茶席で膝を並べた。また謡曲を梅若万三郎・六郎兄弟について習っていた。
・一方、三井家並びに会社関係で海外からの賓客の応接待はほとんど上田の一手に任されたし、また在留外人との公私の交際範囲は広かったので外国風の生活感情を棄て切れなかった。当時のハイカラの一人であった。東京倶楽部（鹿鳴館）などで屢々カード卓を囲んだが、帰宅後必ず晩酌を楽しんだ。若年から相当の酒豪

であったが決して乱れなかった。

○明治三十二年（一八九九）四十五歳

・一月、月俸五百円となる。

・五月、名古屋（製糸所等視察）、四日市（三重紡績）、鳥羽（御木本真珠）、および大阪・神戸各支店を巡回した。

・十月、豊田佐吉発明の豊田式織布機の優秀性を評価し、三井商店理事会の席上これを詳しく説明し、三井が出資してその製造販売を援助することを提議した。

・十二月、九州出張。山野・金田・豊国等筑豊各炭坑を巡視し、三池にも寄り、また杵島・市村・福母等の各炭坑も視察した。

・十一月、日本鉛管製造会社取締役に就任。

○明治三十三年（一九〇〇）四十六歳

・一月、商況社業務担当社員に就任。

・六月、大阪出張。藤田伝三郎、藤田平太郎、河上謹一・岩下清周等と会談した。鉛管会社工場も検分した。その間の一日、井上伯に従って奈良正倉院御物を拝観した。

・七月一日、三井家家憲完成しこの日から実施に付き、祭典があり「主人夫妻幷ニ重役一同参列、井上伯顧問トナラレ都築氏副顧問トナル、渋沢、穂積両氏モ列席。」三井家家憲制定会議（理事会）は同年三月から始まったが、上田は初回から欠かさず出席していた。

・十二月十日、台湾製糖株式会社が創立。かねて発起人として益田孝、ロバート・アルウインと熟議をこらし、官民多数の関係者と折衝を重ねて来た。自分は監査役に就任した。

・その頃の上田の健康状態は必ずしも良好ではなく、会社欠勤も少くなかったが自宅静養中にも公私の訪客が絶えなかった。然るにこの年十一月に、同年三月に誕生した五男栄五郎が急病で夭折したので、強いショックを受け宿痾がとみに昂進したようであった。（子女は上海生まれの五人と、帰朝後東京で儲けた三男子二女子を併せて十人。長男信一は麻布中学に在学していた。）そのために長期欠勤が続き、また各種の会合や招待も大抵辞退していたが、会社理事会だけには殆んど無欠席であった。

○明治三十四年（一九〇一）四十七歳・終焉

・一月一日、年頭恒例の三井十一家を始め先輩知友親戚間の回礼をこの年は全廃し、前日大晦日の午后から家族を伴って三浦郡葉山の鍵屋旅館に静養して迎春した。葉山から箱根・熱海にも遊び新春八日に帰京したが、橋本綱常、岡田和一郎の両博士の診察を受けた後、同月十五日、大磯に転地し招仙閣別館に逗留した。近辺を散策するが、全く出京執務せず、しかしここにも訪客は絶えない。その中で一月三十一日には、御木本幸吉が来訪した。同日の上田日記に、

「伊太里（利）ヘ初回送出セシ真珠全ク取引済トナリタル喜悦ノ余リ礼詞ヲ述ベンガタメ来レルナリ」とある。御木本は前年来頻繁に本社に来訪し、真珠の見本は上田の手から海外各支店へまわされていた。

・二月に入って健康は稍々好転したので大磯から興津・三保に遊

んだ。この頃東商議員改選で再び候補におされたが病気辞退した。一旦大磯に戻った後二月十一日大磯を引払って帰京したが、十五日には再び葉山鍵屋に入った。葉山ではそこに別荘を持つ團琢磨と桂太郎（当時陸軍中将）のすすめで、同村一色在に自分も別荘地を入手することに決した。二十五日に帰京、当時三田の本邸（改築）および小山町別宅を清水組の手で工事中であったため、一家は本邸隣接地の後藤象次郎旧邸内に仮寓していた。

・三月五日に会社に出勤、同日の理事会にも出席した。

・三月七日、妻同伴、東京発京阪神を経て、十五日長崎着、会社関係者の外に親戚知友とも往来し、皓台寺に実父母、養父の墓参をした。これが最後の帰郷となった。（後に本籍を東京に移す。）

・三月十八日、「大勢の見送りを受け」神戸丸で長崎出帆、二十日神戸に上陸、大阪に至り、ここから御木本幸吉の誘引により志摩の真珠養殖所を訪れることとなり、その前、伊勢参宮もしてから、志摩神明浦多徳島に来て海女の真珠とりの実況も見た。この行には大阪から呉大五郎が同行した。帰路、名古屋で豊田式織機工場も視察し二十五日帰京した。

・四月になって葉山一色の別荘の工事も始まったので付近の鹿島別荘を借り受け、週末には必ず葉山に出かけ、そこから直接出社することもあった。五月十五日三田小山町別宅が落成し、後藤伯旧邸内の仮寓から移転した。

・この頃から病状は次第に悪化して来たが、理事会はほとんど欠かさず出席していた。しかし五月二十四日第四十回の重役会が遂に最終となった。そして二十五日まで辛うじて出勤がつづいた。

・その日（土曜日）午后、妻と四女をつれて葉山に出かけ、翌日は團琢磨夫妻や金子堅太郎（当時は男爵）と会して一日を楽しんだが、二十七日帰京後、俄かに発熱し三十九度九分にも昇り、橋本博士の来診を乞うほどになった。

・自筆日記は明治三十四年六月六日を限りにして、それ迄の一週間の日日の天候と自分の体温の昇降と来訪者名だけを記録して永久に黙している。

・七月に入り病いよいよ革り、同月十一日危篤におちいり、十二日午前五時三十分、死去した。享年四十七歳。北野元峰師の引導で芝愛宕町の青松寺に葬る。諡曰、全明院泰安維信居士。（了）

〔後記〕この年譜は、亡父上田安三郎が今から九十数年前に書いていた英文日記（米国留学時代）、および上海赴任日記（明治十年）を始めとして、上海支店長時代の多くの出張日誌、その後十年間の東京日記（理事時代）、自筆身上書（出自）、書簡（会社内状）等すべてその原本を基とし、それに死後の新聞記事、会社進退録、既刊書中の諸家の追懐談その他故人に関係深い記事等を参酌し、また亡母からの伝聞をも若干とり入れて、新たに書き卸したものである。会社史料には三井文庫の助力も仰いで能う限り正確を期したが、なお首尾一貫しない点はみな筆者の不文の故である。この度はじめて上海内状の翻刻が企てられ、従って先人の名にも光りが当

てられることは感激の至りであり、ここに財団法人三井文庫、特に田中康雄氏ならびにその他の研究員の方々に対し深い敬意と感謝をささげる。（昭和四十八年十月上田寿四郎識）

(ロノ津積)輸出量　(単位トン)

至明治25年)

天津	福州	厦門	ラングーン	マニラ	バタビア	マドラス	コロンボ	サイゴン	その他	総計
209	…	…	…	…	…	…	…	…	…	409
…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	7,512
…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	34,067
6,880	…	…	…	…	…	…	…	…	…	70,214
7,958	…	…	…	…	…	…	…	…	…	69,002
…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	91,302
1,176	…	…	…	…	…	…	…	…	…	77,289
2,687	…	…	…	…	…	…	…	…	…	125,414
…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	179,872
…	50	…	…	…	…	…	…	…	…	186,230
…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	193,150
…	1,124	2,384	…	…	4,355	…	…	…	(桑港) 972	217,302
…	604	…	1,450	…	…	…	…	…	…	278,909
…	820	…	1,950	300	2,000	…	1,940	1,809	…	293,705
…	2,565	1,620	2,955	2,910	…	…	…	…	…	327,100
…	2,300	1,086	2,679	3,387	…	3,530	…	…	(牛荘) 324	306,431

石炭生産量

至明治25年)

	明治
……158,592 トン	22 (1889) ……462,271 トン
……209,775 〃	23 (1890) ……487,641 〃
……248,137 〃	24 (1891) ……574,330 〃
……277,718 〃	25 (1892) ……468,831 〃
……317,717 〃	(25年は炭坑浸水による生産低下)
……368,109 〃	

(1893年版上海三井物産・英文刊行物に拠る)

三池石炭海外向ケ

（自明治10年

明治	西暦	上海	香港	シンガポール	汕頭	芝罘
10	1877	200	…	…	…	…
11	1878	7,512	…	…	…	…
12	1879	34,067	…	…	…	…
13	1880	62,105	577	…	…	652
14	1881	55,467	…	…	2,848	2,729
15	1882	89,038	…	…	930	1,334
16	1883	56,882	15,177	…	2,802	1,252
17	1884	77,054	29,291	6,407	6,758	3,217
18	1885	81,864	85,405	…	10,953	1,650
19	1886	59,805	110,627	9,600	5,498	650
20	1887	54,739	116,917	11,724	9,119	651
21	1888	62,946	102,225	31,620	7,891	3,785
22	1889	106,027	141,196	9,331	13,237	7,064
23	1890	95,779	141,275	25,867	18,327	3,638
24	1891	90,399	185,549	24,892	15,495	715
25	1892（上半季）	79,631	159,748	38,811	11,955	2,930

三池炭礦

（自明治10年

明治		明治	
10 (1877) ……	54,589 トン	16 (1883) ……	
11 (1878) ……	78,207 〃	17 (1884) ……	
12 (1879) ……	120,186 〃	18 (1885) ……	
13 (1880) ……	118,211 〃	19 (1886) ……	
14 (1881) ……	168,899 〃	20 (1887) ……	
15 (1882) ……	156,430 〃	21 (1888) ……	